

ヤコブの 12 人の息子の名前に啓示されている 「キリスト証言」

ベレーシート

●今回取り上げる「靈性の回復セミナー」のテーマは、ヤコブの 12 人の息子たちの名前の中に啓示されているキリスト証言です。創世記と申命記には父ヤコブの預言とモーセの祝福があります。しかしそれらについての考察ではなく、息子たちの名前そのものに隠されているキリスト証言です。つまり、それは父ヤコブ、そして彼らの母たちの思いとは別枠にあるものです。12 人の息子たちの名前は、ヤコブの妻であったレアとラケルの夫に対する愛をめぐる相克から、しかも大部分が母親によって名づけられています。その名前の意味は、きわめて個人的、かつ自己本位です。ところが彼女たちの思いや意図を越えたところに、子どもたちの名前がキリストを証言しているのです。

1. ヤコブの 12 人の息子たち

●以下の二つの図をご覧ください。大祭司の胸当て(エポデ)に埋め込まれている 12 の宝石と両肩にある金の細工の二つの宝石の配置には二つのパターンがあります。【図 1】は出生の順であり、【図 2】は行進の順です。

【図 1】

エポデの前と後ろを繋げるための二つの肩むも(出 28:7, 39:4)



右肩には、ルベン、シメオン、レビ、ユダ、ダン、ナフタリ、
左肩には、ガド、アシェル、イッサカル、ゼブルン、ヨセフ、ベニヤミン



【図 2】 荒野での行進の順

最初がユダ族で、最後はナフタリ族となっています。また、1~3 は宿営の東側、4~6 は宿営の南側、7~9 は宿営の西側、10~12 は宿営の北側に位置しています。

3	ゼブルン	2	イッサカル	1	ユダ
	エメラルド		トパーズ		ルビー(赤めのう)
	זָבֻלֹן		יִסָּכָר		יְהוּדָה
6	ガド	5	シメオン	4	ルベン
	ダイヤモンド		サファイヤ		トルコ玉
	גָּד		שִׁמְעוֹן		רֹבֵן
9	ベニヤミン	8	マナセ	7	エフライム
	紫水晶		めのう		ヒヤシンス石(オパール)
	בִּנְיָמִן		מְנַשֶּׁה		עֵפְרַיִם
12	ナフタリ	11	アシェル	10	ダン
	碧玉		しほめのう		緑柱石(翡翠)
	נַפְתָּלִי		אַשֶּׁר		דָּן

(1) 12 人の息子の最初と最後の名の中にある「ベーン」(בֵּן)

●下記のチャートにあるヤコブの 12 人の息子たちの順序は**出生順**です。

No	母親	子の名前	ヘブル表記・読み	意味	テーマ
1	レア	ルベン	「レウヴェーン」 רְאוּבֵן	御子を見よ	聖書の主題
2	(ラケル)	シメオン	「シムオン」 שִׁמְעוֹן	(御子に)聞け	聴従
3		レビ	「レーヴィー」 לֵוִי	(御子と)結びつく	一体・共感
4		ユダ	「イエフダー」 יְהוּדָה	(御子を)賛美する	賛美・感謝
5	ビルハ	ダン	「ダーン」 דָּן	(御子は)さばく	王なる支配
6	(ズラ)	ナフタリ	「ナフターリー」 נַפְתָּלִי	(御子は)戦う	しもべの苦難
7	シルバ	ガド	「ガード」 גָּד	(御子は)告げる	福音の告知
8	(ラケル)	アシエル	「アーシェール」 אֲשֵׁר	(御子は)幸いな人	繁栄
9	レア	イッサカル	「イッサハーール」 יִשָּׂכָר	(御子は)報いを賦与	励まし
10		ゼブルン	「ゼヴルーン」 זְבֻלֹן	(御子は)賜物を賦与	崇敬
11	ラケル	ヨセフ	「ヨーセーフ」 יוֹסֵף	(御子は)祝福の拡大	苦難と栄光
12	(ラケル)	ベニヤミン	「ヴィンヤーミン」 בְּנֵימִן	御父の右に座す御子	権威

●**最初と最後に**注目してください。最初の「ルベン」と最後の「ベニヤミン」の名前の中に、それぞれ、「子」を意味する「ベーン」(בֵּן)という語彙が組み込まれています。つまり、12 人の息子の名前全体が、「ベーン」(בֵּן)という語彙に枠づけられて(囲まれて)いる格好になっています。ここでいう「子」に、神の御子**イエシュア**があかしされていると考えられます。この御子イエシュアこそ、聖書の全巻における中心人物であり、あかしされるべき主題です。なぜなら、神である主、あるいは御座についておられる方が、「わたしはアルファであり、オメガである」「最初であり、最後である」「初めであり、終わりである」と語っているおられるからです(黙示録 1:8、21:6)。

(2) 聖書はイエシュアについて証言している

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 5 章 39 節

あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。

その聖書は、わたしについて証ししているものです。

(※ここでの聖書は「ケトウーヴィーム」סְפָרִים=諸書)

【新改訳 2017】ルカの福音書 24 章 25~27 節

25 そこでイエスは彼らに言われた。「ああ、愚かな者たち。心が鈍くて、預言者たちの言ったことすべてを信じられないものたち。

26 キリストは必ずそのような苦しみを受け、それから、その栄光に入るはずだったではありませんか。」

27 それからイエスは、モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを

彼らに説き明かされた。 (※モーセは「トラー」(תֹרָה)を代表し、預言者は「ネヴィーイーム」(נְבִיאִים)、聖書は「ケトゥーヴィーム」(כְּתוּבִים)を意味している)

【新改訳 2017】ルカの福音書 24 章 44 節

そしてイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたと一緒にいたころ、あなたがたに話したことはこうです。

わたしについて、モーセの律法と預言者たちの書と詩篇に書いてあることは、すべて成就しなければなりません。」

(※律法(תֹרָה)、預言者たち(נְבִיאִים)、そして詩篇(「テヒツリーム」סֵפֶר הַתְּהִלִּים)は諸書を代表しています)

●「子」(御子)がいるということは、必然的に「父」(御父)がいなければなりません。聖書は「御父と御子」のゆるぎない信頼関係を、「永遠のいのち」ということばで表しています(ヨハネ 17:3)。「御父」と「御子」とは互いを必要とし、永遠に信頼し合って存在しています。御父は御子によって世界を造り、天と地における「万物」「見えるものも見えないものも」「天と地にあるすべて」は、御子によって存在している「ひとつの家(住まい)」です。その「家」(住まい)の中に、神のみこころ、創造、墮罪、救い、福音、御国、統治、王座、栄光、シャーロームといった事柄のすべてがあるのです。回復のみわざも、創造のわざをゆだねられた御子によってなされます。「子」は「父」のすべてを啓示する存在であり、「父」は「子」を通してすべてをなさるのです。

●その「子」(御子)であるイエシュアが、「**聖書(=旧約聖書)はわたしについて証している**」と述べています。どのようなかたちを通して証しされているのかと言えば、

① **予型的な出来事**を通して

例えば、「過越」「紅海徒渉」「荒野の経験」「捕囚と解放」「幕屋」「神殿」「王国」「主へのいけにえ(ささげもの)」「主の例祭」など。

② **メシアを表わす預言的語彙**を通して

例えば、「女のすえ」「赤いひも」「マナ」「岩」「若枝」「苦難のしもべ」「花婿」など。

③ **メシア的詩篇**を通して

例えば、詩篇 2 篇、8 篇、22 篇、24 篇、40 篇、45 篇・・・110 篇など。

④ **人物や地名など名前**(ヘブル語)を通して

例えば、「メルキゼデク」「ベツレヘム」「エルサレム」など。

●聖書そのものではありませんが、まとまったものとしては、**聖書全 66 巻**を通しての「キリスト証言」の文書や説教。例えば、

①アリス・メリー・ホッジキン女史の「六十六巻のキリスト」(訳者;笹尾鉄三郎)。

②小林和夫の「著作集第 1～第 3 巻」に収録されている『聖書 66 巻のキリスト証言』など。

●「聖書はわたしについて証している」とするならば、聖書のどの箇所を切ったとしても、金太郎飴のように、そこに御子イエシュアがいなければなりません。それを見出すことによって、イエシュアの御名

はより高くされ、あがめられることとなります。とすれば、聖書の中にそれを見出すことは、主にある者(主のしもべ)としての最高の務めとなります。教会における説教者の務めは、常に、**キリストを中心とする説教**が語られ、説き明かされ続けなければならないと信じます。しかしそれは決して容易なことではありません。というのは、真理の宝は地下深くにある鉱脈に隠されており、掘り出す者がいなければ決して見出されることはできないからです。以下のみことばにあるように、キリストの弟子は真理の宝を捜し出す学者(「ソフエール」**סוֹפְרֵי**)でなければなりません。

【新改訳 2017】 マタイの福音書 13 章 52 節

そこでイエスは言われた。「こういうわけで、天の御国の弟子となった学者はみな、自分の倉から新しい物と古い物を取り出す、一家の主人のようです。」

2. 12 人の息子たちの名前に見る「キリスト証言」

(1) 「ルベン」・「子を見よ」

●ヤコブの最初の子、長子ルベンの名は「レウーヴェーン」(**לְוִיָּהוּן**)です。母レアの長男です。その意味は「**子を見よ。**」です。創世記 29 章 32 節には「ルベン」が生まれた時の告白が記されています。

【新改訳 2017】 創世記 29 章 31～32 節

31 【主】はレアが嫌われているのを見て、彼女の胎を開かれたが、ラケルは不妊の女であった。

32 レアは身ごもって男の子を産み、その子をルベンと名づけた。彼女が、「【主】は私の悩みをご覧になった。
今こそ夫は私を愛するでしょう」と言ったからである。

●「ルベン」の名前にはレアのきわめて個人的な悩みが隠されています。主が私の悩みをご覧になったということで「ルベン」と名づけられたのですが、似たような経験をした女性がいます。それはアブラムの妻サライの女奴隷ハガルです。彼女がみごもったことで女主人のサライを見下げたために、サライは彼女をいじめて家から追い出します。ところが主の使いは荒野の泉で彼女を見つけ、サライのもとに帰るように諭します。そして生まれて来る子をイシュマエルと名づけるように命じて預言をします。その時、ハガルは自分に語りかけて下さった主の名を「エール・ロイー」(**אֵל רוּי**)と呼びました(創世記 16:13)。その名が意味することは「私を顧みられる神」という意味です。

●ハガルにしても、レアにしても神が自分のことを顧みて下さった、自分の悩みをご覧になったという共通の経験がありますが、レアの子「ルベン」の名前は、なんと「子を見よ」という意味なのです。とても不思議なことです。というのは、母の思いを越えた名前になっているのです。つまり個人的な意味合いではなく、預言的な意味合いになっているのです。「ルベン」を文字通りに解釈すれば、「見る」の「ラーアー」(**רָאָה**)の命令形「レウー」(**רָאוּ**)と「子」を意味する「ベーン」(**בֵּן**)が組み合わさっている名前です。

ここでの「子」は「御子イエシュア」のことを証言していると考えられます。

●そもそも、「子を見よ」と語っているのはだれでしょうか。御子イエシュアをこの世に遣わし、そのイエシュアが公生涯に就くために、バプテスマのヨハネから洗礼を受けられた時、「天が開け、神の御霊が鳩のように下って」来るのをイエシュアはご覧になりました。そして天から告げる声が聞こえたのです。「また、これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」(マタイ 3:17)。ギリシア語原文では「すると、見よ。天から告げる声。『これは、わたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ(=満足する)』」となっています。ここでの「見よ」は、ギリシア語の「イドゥー」(ιδού)。ヘブル語にすると「ヒンネー」(הִנֵּה)です。また「わたしの愛する子」のヘブル語は「ベニー・イエディーディー」(בְּנֵי יְדִידֵי)です。そしてこの「子」は、「わたしの喜びとするところの子」なのです。「喜びとする」は「ラーツァー」(הֲצִי)の分詞。その名詞は「ラーツォーン」(רִצּוֹן)で、それは「際立った喜び、満足、好意、受容」を意味します。私たちは御父が喜びとする御子を、より深い次元において、「見る」必要があります。

●新約聖書のヘブル人への手紙の鍵語は 12 章 2 節にあるように「イエシュアから目を離さないでいる」ことです。つまり、イエシュアだけに「目を注ぎ」、イエシュアだけを「仰ぎ見なさい」ということです。「目を離さない」「仰ぎ見る」「見つめる」「目を注ぐ」と訳されている原語は、ギリシア語の「アフォラオー」(αφοραω)ですが、新約聖書ではこの箇所と他にもう一箇所にはしか使われていません。聖書にはしばしば一回しか使われていないことばがあります。一回しか使われていないということで、それを無視してはなりません。たとえ数が少なくても、それはひとつの個性であり、何か大切なものを秘めているということがあるのです。そしてそれはとても重要であるのです。そんな発見をしながら、ことばのもつ意味を考えることは楽しいことです。

●「アフォラオー」(αφοραω)をヘブル語に換言すると「ナーヴァト」(נָוַט)という言葉が使われています。いずれもイエシュアに目を注ぐために、他のすべてのものを見るのをやめることを意味します。真のキリスト者とは、完全な集中力をもって、御子イエシュアを見つめ(仰ぎ)、驚きのまなざしをもって見る者のことです。それはまさに恋人が愛する人をうっとりときみつめている様子に近いかもしれません。私たちの心を散らす一切のものから目をそむけて、ただイエシュアにのみ目を注ぐという姿勢(生き方)です。愛するというのそういうことではないでしょうか。夫婦でも、自分の連れ合いにではなく他の人に目が行っていたとしたら、良い夫婦となれる保証はありません。目移りしていたのでは良い関係を築くことはできません。ましてや愛の関係を持つことはできません。そのような意味において、御父は御子を「見」、御子は御父を「見て」おられるのです。私たちが御子イエシュアを「仰ぎ見る」ということは、イエシュアを本当の意味で愛しているということであり、愛しているならば、「仰ぎ見る」ということは決して難しいことではないはずなのです。

●さらに、イエシュアに向けられる「まなざし」としての「目」は私たちの体の一部分ですが、聖書において「目」という場合、それは存在全体を表します。イエシュアは言われました。

連盟冬の牧師会「靈性の回復セミナー」

- 22 からだの明かりは目です。ですから、あなたの目が健やかなら全身が明るくなりますが、
- 23 目が悪ければ全身が暗くなります。ですから、もしあなたのうちにある光が闇なら、その闇はどれほどでしょうか。
- 24 だれも二人の主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛することになるか、一方を重んじて他方を軽んじることとなります。あなたがたは神と富とに仕えることはできません。

●自分が今直面している問題や周囲の状況にばかり気を取られたり、あるいは自分自身や自分の弱さにばかり気を取られたりすると、見なければならぬ大切なものを見ることができなくなってしまいます。関心は、問題そのものでも、状況でも、自分自身でもなく、常に御子イエシュアに向けられるべきです。イエシュアから目を離すことなく、イエシュアだけを仰ぎ見、イエシュアに私たちのまなざしをしっかりと固定しなければなりません。それが、「ルベン」(רַבֵּן)という名前に啓示されていることなのです。

(2) 「シメオン」・・・「(子に)聞け」

●レアの二番目の息子の名は「シメオン」(「シムオン」שִׁמְעוֹן)です。レアは「主は私が嫌われるのを聞いて、この子を私に授けてくださった」と言って、その子をシメオンと名づけたとあります(創世記 29:33)。しかし、「シメオン」の名も明確にキリストを証している名前なのです。

●申命記 6章 4節に、有名な「シエマ・イスラエル」(שְׁמַע יִשְׂרָאֵל)があります。「聞け。イスラエルよ。」という意味です。「シエマ」(שְׁמַע)とは、「シャーマ」(שָׁמַע)の単数の命令形です。つまりイスラエルが集合名詞(単数)として扱われているわけです。ところが、複数の命令形の場合は、「シムウー」(שִׁמְעוּ)となります。ですから、「シメオン」(正確には「シムオン」שִׁמְעוֹן)の意味を、「あなたがたは聞け」と解釈できるのです。では、誰に聞くのでしょうか。

●イエシュアは三人の弟子たち(ペテロ、ヤコブ、その兄弟ヨハネ)を連れて高い山(ヘルモン山)に連れて行きました(マタイ 17章)。そしてそこでイエシュアは変貌しました。つまり御子が本来の姿になったのです。「顔は太陽のように輝き、衣は光のように白くなった。」とあります。弟子たちの目には白く輝くばかりで、イエシュアの姿は見えませんでした。ところがそのとき天からの声を聞いたのです。

【新改訳 2017】マタイの福音書 17章 5節

・・・すると見よ、雲の中から「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。彼の言うことを聞け」という声がした。

●「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ」という天からの声は、すでにイエシュアが公生涯を始められる時に語られています(マタイ 3:17)。しかしこの箇所では、その後に「彼の言うことを聞け」という声がつけ加わっています。ここでの「彼」とはイエシュアのことです。なにゆえに彼の言うことを聞かなければならないのでしょうか。それは、イエシュアが「わたしと父とは一つです」(ヨハネ 10:30)と語っているように、御父と御子がひとつ(同一の本質=「エハーッド」אֶחָד)だからです。

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 5章 19節

連盟冬の牧師会「靈性の回復セミナー」

・・・「まことに、まことに、あなたがたに言います。子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分から何も行うことはできません。すべて父がなさることを、子も同様に行うのです。

●イエシュアの語ったことば、イエシュアがなされたみわざは、彼自身のものではなく、すべて御父のことばであり、御父のみわざでした。御子は御父の声を聞いて従いました。「聞く」ことは「従う」ことと同義です。

(3) 「レビ」・・・「(御子と)結びつく」

●レアの三番目の息子の名は「レビ」(「レーヴィー」^{לֵוִי})です。レアはまたもや「今度こそ、夫は私に結びつくでしょう。私が彼に三人の子を産んだのだから」と言って名づけたのが「レビ」でした。この名前の中に、夫を自分に結びつけようとするレアの必死な姿を見ます。しかし実はこれもキリストを証言する名前なのです。

●御子イエシュアを見、そして彼の声に聞き従うことを別のことばで表現するなら、それは「とどまる」ということばになります。ギリシア語では「メノー」(^{μένω})ですが、それは緊密な親しいのちの交わりを意味するとても重要な言葉で、それは結ばれて、いのちを共有する伴侶となることです。花嫁が花婿と結婚することを意味します。御父と御子が一体であるように、御子と私たちが花婿と花嫁のように一体となることを意味します。

●この「メノー」(^{μένω})をヘブル語に換言するなら、それは「アーマド」(^{אָמַד})となり、「共に堅く立ち続けること」を意味します。あるいは「メノー」(^{μένω})は「知る」を意味する「ヤーダ」(^{יָדָה})とも言い換えられます。聖書の夫婦の愛の交わりは「知る」ということばで表されます(創世記 4:1)。同様に、「神を知る」ことは「神と心をつつにする」ことであり、神と共感し、神と連帯することを意味します。そしてそれは御父と御子が一つであるような一体、つまり「エハーッド」(^{אֶחָד})を意味します。これが「永遠のいのち」と言われるものです。

●このように、「レビ」という名前には、神のご計画とみこころ、御旨と目的が啓示されていると言えます。やがてはイエシュアによって天と地が一つとなり、神と人とが、すべてのものが共にひとつの家に住むようになるのです。

【新改訳 2017】エペソ人への手紙 1 章 10 節

時が満ちて計画が実行に移され、天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つに集められることです。

※「一つに集められる」と訳されたことばの意味は「ともに向い合わせる」(「カーヴァル」^{קָבַל})と解釈できます。つまり、すべての被造物がイエシュアと「結び合わされる」のです。

(4) 「ユダ」・・・「(御子を)賛美する」

●レアは立て続けに四人目の子を産みます。そしてその子の名をユダ(「イエフーダー」 יהודה)と名づけました。それは「今度は、私は【主】をほめたたえます」という意味ですが、レビの時の切迫感をもった「今度は」とは異なり、ここではむしろラケルに対するレアの優越感を感じさせる「今度は」のニュアンスです。レアは妹ラケルに完全に勝利できたと思い、夫の愛は今や自分に完全に向けられることを確信したようです。実に自分勝手な意味の名前と言えないでしょうか。ところがこの名前もキリストを証する名前となっているのです。主を賛美すること、主に感謝することが「ユダ」という名前が示している意味です。

●神のご計画が御子イエシュアによって実現される時が来た暁には、天においても地においても、爆発的な神への賛美が湧き起こります。すでに御子イエシュアがこの地上に誕生されたときにも、天の軍勢が現われて次のように賛美しました。

【新改訳 2017】ルカの福音書 2 章 13~14 節

13 すると突然、その御使いと一緒におびたしい数の天の軍勢が現れて、神を賛美した。

14 「いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」

●これは「天軍賛歌」と言われるものですが、特に 14 節の内容はきわめて深く、預言的な内容を含んでいます。歌の中にある「栄光」ということばの意味、「平和」ということばの意味が分らないと、この歌を歌えたとしても、その意味が理解できません。「栄光」のヘブル語は「カーヴォード」(קָוֹד)ですが、この言葉には「輝き」という意味の他に、「重い」「重くする」という意味があります。つまり、天におられる神にとって「重い事柄」ということになります。この栄光が現わされることを「シャハイナ・グローリー」とも言います。つまり、神の重い事柄が目に見える形で現わされることを、聖書は「神の栄光が現われる」と表現しています。

●神にとって、「重い事柄」とは何でしょうか。それは、神が天と地を創造される前から持っておられた「重い事柄」です。それは、**神が人とともに住む(インマヌエル)**ということではなくて何でしょうか。人が創造される前、それまで被造物として最高の知恵と美を備えられた大天使が人という新しい存在を創造するという神のご計画を知った時、彼はどう思ったことでしょうか。聖書には明確に記されていませんが、このことが原因で神の敵であるサタンとなってしまったことは十分に考えられます。神の第二の地位に置かれた人間はすべての被造物の頂点に置かれただけでなく、すべての被造物を支配する権威を与えられました。その権威を与えられた人間に対して、サタンは狡猾にだまして、その権威を合法的に奪い取ることに成功したのです。だからといって「神と人がともに住む」という永遠のご計画を神が放棄されたわけではありません。それをどのようにして回復し、実現するかを、神は長い時間をかけて、また選民イスラエル、あるいは教会を通して、また、幕屋、神殿、教会、御国、メシア王国という概念を通して啓示して来られました。これらはすべて**神と人が共に住む神の「家」の概念**です。王と民のかかわりも、花婿と花嫁のかか

わりも、すべては「家」(「バイト」 תַּיִב)の概念の中に囲われているのです。

●この地上に「神と人とがともに住む」ことが実現することでもたらされるあらゆる祝福の総称が、「平和」ということばで表されます。これがヘブル語の「シャーローム」(שָׁלוֹם)の意味です。この「平和」(「シャーローム」)の語源は動詞の「シャーレーム」(שָׁלַם)で、それはこの地上に「神のご計画とみこころ、御旨(=神の喜び)と目的が実現・成就すること、完成すること」を意味しているのです。そして、この祝福を受けるのは、神のみこころにかなう人々(=イエシュアをメシアと信じる人々)なのです。

●「主の祈り」にある「御国が来ますように」という祈りも、神にとってもきわめて「重い事柄」がこの地に実現するよという祈りです。地は、天にあることの写し(コピー)ですが、やがてイエシュアが再臨されると、天と地は一つになります(エペソ 1:10)。つまり地は天の写しではなく、すべてが天の実体となるのです。詩篇にある多くの賛美は、本来的にそこに向けられた預言的な賛美だと考えるなら、詩篇にある爆発的賛美が文字通り(大げさではなく)理解できるようになります。そしてまた、詩篇は神のご計画におけるキリストを証言する預言書だということがよりはっきりと見えてくるのです。イエシュアの両手が当てられた盲人の両目が最初はぼんやりと見えはじめ、やがてははっきりと見えるようになったように(マルコ 8:22~26)、詩篇を通して、神のご計画の全貌がよりはっきりと見えるようになるのです。

ベアハリート

●神のご計画の完成の時ににおいて、必然的にメシアによる權威の行使としての「さばき」がもたらされます。これはヤコブの五番目の息子である「ダン」(דָּן)の名前の語源となっている「ディーン」(דִּין)という言葉にあかされていますが、それについては今回取り扱わないでおきます。なぜなら、レアが四人目のユダが生まれた後に、「**彼女は子を産まなくなった**」(創世記 29:35)と記されているからです。実際は、あと二人の息子(イッサカルとゼブルン)を産むことになるのですが、なぜ聖書は「**彼女は子を産まなくなった**」と記しているのでしょうか。それはレアから生まれた「ルベン」「シメオン」「レビ」「ユダ」の四人の息子が生まれたことで、御子イエシュアの証しが、ここで一つの括り(完結された証言)となっているからではないかと推察します。つまりこれら四人の名前が、イエシュアを通してなされる神のご計画の全体像の大枠として証しされているからではないかと思われま

●四人の名前の中に、「**御子を見よ**」(ルベン)、そして「**(御子に)聞け**」(シメオン)、そうするならば「**(御子と)結びつき**」(レビ)、「**(御子)を賛美する**」(ユダ)ようになるという一連のメッセージが浮かび上がって来ます。今回の「靈性の回復セミナー」はここまでにしておきます。まだ八人の息子たちの名前が残っています。彼らの名前の中にどのようなキリスト証言が隠されているのかを探し求めなければなりません。しかしそれは別の機会に取り上げることにしたいと思います。

2018.2.14 静岡・掛川にて

銘形 秀則